

パリ・オープンスクール訪問記 (École à Aires Ouvertes S^T Merri / Renard)

学習院大学 川口幸宏

(1)

2000年最後のIPEMの月例研究会のおり、フランスの公立学校の門戸がなかなか固くて開かないと「愚痴」をこぼしたら、そんなことはない、正規の手続きをすればほとんどだいじょうぶだ、との助言をいただいた。しかしながら、それはフランス国内のフランス人教師の経験でしかない、現に、いくつもの学校の訪問許可を求めたが、そのほとんどが返事が来ないか拒否の回答だった、返事が来たものは「然るべき筋からの紹介を得てから、再度許可を求めてほしい」という内容だった、と反論した。そのやりとりを聞いていた一人のマダムが、もし私の学校に興味があるのなら、訪問できるように校長に取りはからってみるから、しばらく待っていてください、とお誘いをくださった。「然るべき筋」をまったく持っていないぼくとしてはたいへんありがたい申し出である。このマダムの学校訪問が実現したのは、2001年3月に入って、帰国準備を慌ただしくしている日のことである。

フランスの学校が外部者に対して閉鎖的なのは、どちらかという親の意識である。誘拐事件という凶悪な事件があって以来とくに親はナイーブになっているそうだが、それだけが理由ではない。外部者の訪問が、たとえ研究的であると言っても、親からすれば、自分の子どもが現に受けている教育以外の目的のために「いろいろな角度から見つめられ」、「分析される」というのに好感を持ってと言う方がおかしいのだ。もっともな親の言い分であるから、ぼくは、ぼくの研究目的の実現に対する積極性をすこしトーンダウンさせ、万が一、機に恵まれれば、と自分に言い聞かせてきた¹。

さて、3月第1週の水曜日、時間は午前10時、学校の前で待っていてくださいと、件の先生、M^{me} Sabine GESSAINから連絡が入った。はて、水曜日と言えば、フランスの公立学校は休みであり、その代わり、社会教育活動を子どもたちは自由意志で受けているはずであるが…。平常日の参観が不可能になったので、水曜日にわざわざ子どもを集めて、授業をしてくださるのだろうか。まさかフランスではそういう例外的なことはあり得るはずはない。そんなことを、まず親が許すはずがないのだから。少々訝りながら、パリ3区の

¹ ぼく（日本人集団）の「参観」というときの態度そのものも問い直さなければならないとも考えている。ヴァンスのフレネ学校にしても、カルメン校長が、もし記録する必要があるとするならば、一人の参観者が授業の様子をビデオに取り、夜、それをみんなで分析的にディスカッションすればいいではないか、何も揃いもそろって、参観者がみんなカメラのフラッシュを焚く必要はないだろう、と言っておられる。まさにその通りのことであって、子どもたちを参観者の目に晒していることだけでも申し訳ないと思わなければならないのだ。

ÉCOLE RUE St-MERRI (11, rue St-Merri 75003 Paris)の玄関に行き着いた²。パリの名所ポンピドー・センターの斜め向かいにある。

行き着いてみて、改めてこの学校について、事前に多少の知識があることを思い出していた。というのは、パリ入りして2ヶ月余が経ったある日、サン・マルタン運河沿いにある、ふと思立って入った古書店で、店主のマダムとフレネ教育について話を交わす機会を得たことがある。マダムは、すでに成人となっている娘さんがフレネ教育を受けていたこと、管理教育では子どもの自由性、自発性、市民性が育たない、パリの公立学校はもう死にかけている、フレネ教育はじつに偉大な教育である、ぜひフレネ教育を見に行くといいと言って、いくつかの学校名を書いてくれた。その中の一つがサン・メリー小学校であった。マダムは、サン・メリー小学校はフレネ教育というよりはオープン・スクール形式であり、非常にすぐれた教育環境にある、とも付け加えてくれた。マダムの書いてくれた住所を頼りに訪問許可を得る手紙を書いたけれど、返事がなかった。しかし諦めきれず、直接、おおよそのあてで学校へと出向いたことがある。もちろん、事前に許可を得ていない者に対しては受付で拒否される。フランス共和国の教育事情をほとんど知らない時期のこととての無謀な行動ではあったが、それでも、玄関のガラス戸の向こう側に飾られている子どもたちの大きな共同製作画を見つめて、タメイキを繰り返していた。参観依頼の手紙が学校に届いたのか、そして校長が封を開けたのか、それは分からない。ただ、古書店のマダムの書いてくれた校名・住所のスペルが間違っていたし、地域番号も書かれていなかったもので、フランスの郵便事情（配達人によって処理の仕方が異なる）を知った今では、おそらく届いていないのだろうとも思う。

ジェサン先生を待っている間、子どもたちが学校の右隣の出入り口を切れ目なく出入りしている。出入り口の上を見ると体育施設との看板が出ている。学校と体育施設とはフロアが一つになっているから、この学校は、幼稚園・小学校・社会体育施設が一体となっている施設・機関である。ガラス越しに、広い体育館とその中二階のフロアがプールになっている様子をのぞき見る事ができた。とにかくパリの幼稚園や小学校の建物が、ふつうのイムブル（建物）であることに見慣れてきたぼくとしては、きわめて驚きを感じた。この施設全体の建築様式も、パリの街を飾っているのとは違い、強く目的性を感じるものである。あとでジェサン先生から伺った話になるが、サン・メリー小学校は、ポンピドー・センターが作られた時期に、その工事と平行して、旧来の建物を壊し、まったく新しく、特別な教育目的を持った施設として建て直されたとのことである。今から30年前のことだそう。その特別な教育目的こそ、オープン・スクール・システムであり、社会教育との連携である（なお、フランスでは「オープン・スクール」と言わず、*école à aires ouvertes* エ

² 学校名は、いくつかの文書で確認をしているが、これ以外にも、*École Sait-Merri / Renard*、*École à Aires Ouverts* などが用いられている。フランスの公立学校名は、たいていが学校の所在する通り名（もしくは自治体名）がつけられている。前者はこの学校が二つの通りに面していることから、後者はこの学校の特徴から呼ぶ俗称である。本稿では、以下、サン・メリー小学校と呼ぶことにする。

コール・ア・エール・ウヴェルトと言う)。

10 時きっかりにジェサン先生が現れた。挨拶を交わしたあと、「参観」にあたっていくつかの説明と注意を受けた。今回の「参観」は施設見学に留める、平常日の参観については校長宛に公式依頼文書を提出して許可を求める(校長は視学官の許可を求めなければならない)、校長は二人いるのでそれぞれ宛に許可申請が必要である、もし平常参観を希望するのならそれは後日にしてほしい、今日は社会教育のために子どもたちが体育施設を使っているが、カメラを子どもに向けないこと、親が非常にナイーブになっているから、それから掃除をしているので床を歩くときに汚さないように気を遣うこと、それは掃除をする人たちの仕事を守る意味である。やはりぼくが勝手に妄想していた「授業」はあり得なかった。それでも、30 年の歴史を誇るオープン・スクール・システム、社会教育と学校教育との連携の具体的な姿などをこの目で納めることができるだけでも、十分に満足である。ジェサン先生のお心遣いに深く感謝しながら、先生の先導を受けて、各施設・教室を回った。

学校・施設は 4 階建て。0 階(日本風に言えば 1 階)は体育諸施設と玄関・受付フロア。1 階から上が、下級階から順に小学校中・高学年(CE2、CM1、CM2)、小学校低・中学年(CP、CE1)、幼稚園(年少、年中、年長)となっている。これらの各階は、特別に目的を持った教室以外は完全に「壁のない」広大な空間となっている。その他に、特別に目的を持った教室、すなわち、フランスでは非常にめずらしい理科室(残念ながら施錠されていて見ることができなかった)、日本に比べれば小さな音楽室、非常に充実した図書室(非常勤の職員が半日勤務し、子どもの読書指導にあっている)、などが壁とドアで区画されていた。2 階のオープン・スペースの一角は 3 人の身体障害児のための空間となっている。そして、この学校は、身体障害者を受け入れるためにかなり大がかりな工事を施した。それは、□の形で建てられていた校舎の中庭を改造し、一つは障害児のための運動空間を設置したこと、あと一つは完全スロープを 0 階から 3 階まで設置したことである。ぼくは先生の案内に従ってまずそのスロープから各階教室に入り、最後には階段を利用して移動した。その他にエレベーターが設置されている。つまり、学校の中の上下移動は 3 種類が揃っていることになる。それぞれに利用の決まりがある。スロープは子どもと親とが移動する際に使用し、階段は子どもと教師が移動する際に使用する。そして子どもだけの移動の際にはエレベーターを使うということになる。

日本にもオープンスクール・システムを取り入れる学校が増えつつある。しかしながら、空間はオープンにしたけれど「学び」をオープンにすることにとまどいと抵抗を感じている数多くの教師は、アコーディオン・カーテンを引き、「壁」を作ってしまった。機能的にオープンにするという際には、その前提として、子どもの「学び」をいかにオープンにするか、という哲学がなければならない。その哲学的なところを抜きにして、オープン・システムならば行政が予算をつけてくれる、という実益部分が先行してしまった我が国の多くのオープンスクール・システムの苦い経験は、生活科が始まり、総合学習が始まって、右往左往。「教科書がなければ教えられない」「教師が指導しなければ子どもは学習はしな

い」などという現状を生み出してしまっている。そうした我が国の大方の事情から考えれば、ぜひとも、この学校での生きたオープンスクールを参観する必要があると、強く願った³。

ここの学校の子どもの6割が「越境」しているという。子どもの入学許可は、校長の面接、そして視学官の許可という手続きが必要なのだが、「越境」の事実は、文部行政としても、そうしてでもこの学校の存在意義を重視している、という事実を物語っているのだろう。パリでの学級定員は行政と組合との話し合いで、国基準30名を下回り28名となっている。しかしこの学校では視学官の判断によって25名を定員としている。各学年2から3クラス。フランスとしては大規模学校である。

今、パリ市では、この学校に対して2クラス減の政策を打ち出している。その理由については目下不明である。後日、資料をいただくことになっている。学級減の政策に対して親たちはきわめて強い反発をし、行動に移しているという。そういえば玄関ガラスに”École occupé!”との大きな張り紙がしてあった。直訳すれば「いっぱい学校!」ということになるが、学級減反対の叫びである。たびたび新聞にも報道され、注目されているできごとであるようだ。「先生方はいかがなんですか?」と訊ねたら、ジェサン先生は、目をまん丸にし、もちろん!と力強く応えてくださった。「では、サンジカ(組合)はいかがなんですか?」と訊ねたら、サンジカはこの学校を特権階級のものだとみなしている風もあり、あまり協力的ではない、それに、近在の学校は、子どもたちを自分たちの学校から奪っている(つまり「越境」という事実に対して好意を持っていない)と考え、あまり協力的でない、と力を落とす風であった。「でも、子どもにとっていい教育をと親が望み、行政も、私たち

³ あと一つ、ぼくにとっては、きわめて懐かしく、こみ上げるものを強く感じるものを目にした。それは変形学習機である。15年余前、ぼくが職場の配置換えで、それまでの理論研究から実践的具体的研究に環境を身を移したとき、個別学習・グループ学習・共同学習などさまざまな学習形態を想定し、自由自在に机を組み合わせることができないだろうかと考え、設計した机がある。旧来型の個人機の固定観念から脱却しなければ、日本の教育現場は変わらないだろうということからの発想であった。出入りの業者と幾度も相談をし、実際に試験的に利用している数少ない事例などの結果を取り寄せ、限られた予算の中で一クラス分を導入した。しかしながら、これは、すこぶる付きの悪評で、当時まだオープンシステムにはしていなかった某国立大学附属学校の先生方からは、「だから学者の甘ちゃん、島流し者の考えることでしかないのだ」(「島流し者」というのは、もちろん、配置換えのことを意味している。また、当時の言葉を使って「窓際族」とも言われていた)と声高に罵られた。やがて附属は、オープン・システムを予算計上し、認められ、校舎全体がまったく「新しく」建て替えられた。悪評の数年後のことである。建て替えと共に、変形机がどのように処理されたのか、ぼくはさらに別の大学に転任していたので、知ることではできなかった。

ぼくが実験的に導入したとまったく同型の机がパリのオープンスクールで使われ、その机がきわめて機能的に子どもの学習に生かされている、との説明を受けたとき、文字通り、生き返った思いをした。日常的には失念していたことであったけれど、やはり心の隅っこに、附属の先生から受けた悪罵は、こびりついていたのである。すーっと涙がこぼれてきたので、あわててハンケチで拭った。先生は「暑いですか?」と訊ねてくれたので、にっこり笑いながら「ええ」と応え、悪罵の部分は省略して変形機を実験的に導入したことを話した。先生は、数度、トレビアン、と返してくれた。

教師もそれを育ててきたのがこの学校であるのです、そのことに対する理解を、組合も、近在の学校も示してくれないのは残念ですね。子どもには特権階級もなにもない、子どもにとって学ぶことが意味があること、それこそすべての教師、学校、親、行政、そして組合も、求めていかなければならないと、私は考えます。」と語って下さった。

一通りの案内を受けた後、「今日、一人の校長が来ていますから、紹介しましょう」とお誘いをいただいた。校長からコーヒーを勧めていただき、しばらく教育談義を交わしていたが、「もしあなたが参観を希望するなら、私宛ともう一人に、簡単に訪問目的を書いて、送ってください。それと今日、あなたの参観訪問の日にちを決めておきましょう。」と、参観を具体的に進めるお誘いをいただいた。その日は3月23日。マルセイユの森の学校（シレスト小学校）のフレネ教育を1週間参観して後の、フランス研修最後の参観となる。

玄関まで送ってくださった校長とジェサン先生の「オーヴァー、アビアントゥ」の声が限りなく暖かい応援歌に聞こえ、春の日差しに温むパリの街へと進み出た。

(2)

3月23日、事前に参観依頼の文書を郵送しておいたし、前もって訪問の日を決めておいたので、安心をして出かけた。しかしながら、依頼の文書は届いてないと言うし、午後からは視学官が来るので午前中だけ、しかも各クラス20分程度の参観に留めてほしいとのこと。依頼文書が届いていないというのは、現在学級減の政策に対して親たちの抵抗は強く、学校宛のすべての手紙類は親が一括管理している、ということに原因があるようだった。校長としては参観依頼文書が届いていない以上、「内密に」参観を許可するしかなく、視学官の来る午後はぼくの参観が露呈しては問題になりかねない、ということになる。その上、参観を始めて分かったことだが、この日の午前中は、CE2、CM1、CM2を対象とした、180万人が参加する統一テスト(“Kangarou 2001”)が行われたため(算数、時間は50分)、授業の参観はきわめて限られた学級数と時間になってしまった⁴。その限られた条件の中で参観し得たことについて、以下に纏めておくことにする。

「学級間の間仕切りのない状態、つまり開かれた空間の中で複数のクラスが行われることは、相互に悪影響を与えることはないのですか。」こういう不躰な問いに対して、校長は、「ここを訪れる人は必ずその質問をします。」と苦笑いをし、続けて「悪影響があるかどうかは、実際にクラスの様子をご覧になって下さい。」と言われた。前回訪問時の質疑の一コマである。もちろんぼくは、日本での、と限定して言うけれども、オープン・システムを取り入れた学校をいくつか参観しているので、ここが始めてではない。これまでの参観経

⁴ フランス共和国に、いわゆる「全国統一学力テスト」がある事実を知ることができたこと、並びに今年度の「算数」の試験問題を入手することができたこととは、望外の結果となった。フレネ教育をすすめている公立の学校の子どもたちも、当然このテストを受けているわけであり、彼らの「学力」と「基準学力」との相関をはかることができる可能性もあることを知ることができたわけである。なお、カンガルー・テストの算数問題は計算力をはかるのではなくロジックの力をはかる出題内容となっている。

験から言えば、我が国でオープン・システムを十分に機能させようとするならば、これまでの教育行政の桎梏を取り払わなければ、きわめて中途半端になり、ただたださわがしい空間、かつて言われたバズ学習の再来⁵となりかねない。バズ学習は子どもの学習活動の賑わしさであるが、ただ空間だけがオープンであるだけでは、それに加えて教師の声も「バズ」を増幅しかねないわけである。「隣のクラスの声」が妨げにならないようなオープン・システムはいったいどのようにしてなされているのか、はなはだ興味深いものがある。つまり、従来の教育行政の桎梏をどのように実践的に乗り越えているか、ということである。

従来の教育行政の桎梏というのは、教科書使用（その単元の配列の順序遵守を含めた）義務を学級編成原理（1学級1担任制）に基づいてクラス（授業）を運営しなければならないという拘束性にある。たとえば、ここサン・メリー小学校のCM2を例にとってこのこと（つまり、教育行政の拘束性）を見てみると、3クラスあるが、そのクラスごとに担任がすべての教科の授業を行う場合、教科書が同一であり、進度も同一であることが求められる状態にあるとすれば、教室空間をオープンにする意義は奈辺にあると考えられるだろうか。何もない。いや、少なくとも、後に述べるように、この一つの特徴であるところの、子どもが空間を自由に往来すること（授業を子どもが選ぶことができること）の積極的な意味は、「教師を選ぶ」ということにだけあるだろう。その選択行為には、「学習内容」＝「学習方法」を選ぶために自由往来をすることは含まれないわけだから、結局「先生が好き」「先生が嫌い」という、教師の人格、人間性を選択する自由でしかない。このことは、けっして教育的でないことは明かである。教師の尊厳が失われるということではなく、自分とは異質な他者との出会いの大きなモデル（教師）となるはずのものに対して、自分と同質の他者を求めるということを推奨していることと同じであり、市民的資質形成とは相反するものである。もし「教師を選ぶ」ということをこれ以外の要素として求めるとするならば、教師が教室に運び込んでくる文化（「学習内容」）とその文化獲得の方法（「学習方法」）でなければならないはずである。しかし、このことは、少なくとも、日本の教育界においては、ほぼ困難な状態、もしくは「ゲリラ」的なもの、桎梏を取り払うことを承知で行政が予算を供出している実験的なものでしか存在しない実状がある。日本のオープン・システムが、全体的に見て、必ずしも「うまく」機能していないことの根本には、このような、じつに大きな問題が存在していることを無視し得ないのである。せめて、某国立付属学校のように、アコーディオン・カーテンという新しい「壁」を「考案」し、そのもとでオープン・システムが機能していると研究報告書に纏めているのが、教育行政の桎梏と「融和」していく、「新しい」教育の方向なのだろう！

こうした「日本的なこと」に対して、フランス共和国には教科書使用義務はない。すべては担当する教師に任せられている。カリキュラム（教育内容と教育方法）が教師の自由裁

⁵ もちろん「バズ学習」が子どもの活動を主体にしたクラスであり、バズであること（蜂の巣をつついたようににぎやかであること）にこそ意味があったわけであるから、オープン・システムにおける「賑わしさ」とは質が違うことを触れておかなければならない。

量に任せられているということは、教育実践の創造が大きく広がる可能性を持つということである。その観点からもサン・メリー小学校での参観は有意義なものと言えよう。サン・メリー小学校は、当然、市販の各種教科書類を使用していない。全校教職員が「一致していること」と言えば、オープン・システムをいかに利活用するか、ということになる。ちなみに、ぼくがフランス共和国の公立幼稚園・小学校を参観した中では、ヴァンスのフレネ学校(École Frinet)、マルセイユのフレネ学校(École Bonneveine MixteII Pédagogie Freinet)、そしてサン・メリー小学校が、全校あげて、「一つの教育法」に取り組んでいる。保育所・託児所では、モンテッソリー法を導入しているところをいくつか参観することができたことは付言しておく。

サン・メリー小学校参観に関しては、オープン・システムの3つの可能性に出会うことができた。

第1は、CM2の3クラスの授業である。一つのスペースに3クラスが、教師の位置をそれぞれ頂点として、三角形の形態で位置していた。つまり各クラスは、廊下にあたるスペースをはさんで、子どもたちが背中合わせをしていたことになる。もちろん子どもたちは、耳を傾けようと思えばそれぞれのクラスの内容を知りうる位置にいる。まさに、「別のクラスの声が授業を受ける妨げになるのではないか」という危惧が生まれる状態である。しかしこの危惧は、杞憂に過ぎなかった。3つのクラスはフランス語(文法)、算数(量)、理科(電気)の授業であり、フランス語と算数がいわゆる一斉授業、理科が作業実験であったけれど、子どもたちは、通常見かける授業以上の真剣さで、それぞれの授業に参加していた。子どもたちが、なぜ「隣のことが気になる」ことがないのか、そのことの本質を明らかにするためには参観を繰り返すしかないと思うが、それでも一つヒントとなったのは、「子どもたちがどの授業を受けるか、自分で決めることができます。」という案内をいただいたことだ⁶。きわめて俗論的例示であるが、混雑した喫茶店で各テーブルごとに話題が異なっても、ぼくたちは、隣の話に引き込まれることなく、自分たちの話題に集中することができる。もちろん、自分のテーブルの話題が自分にとってふさわしいもの、テーブルメンバーにとってふさわしいものの場合に、そのことは限られる。しかも、自分たちのテーブルの空間にふさわしい声量を自ずと選んでいるわけである。まさにオープン・システムとはこのことなのだろうと思う。校長の案内では、今回見たような一斉授業、共同学習、しかも教師指導型ばかりではなく、グループ学習も採り入れているということであるから、個別学習主体のオープン・システムではなく、授業形態としては古典的なもので

⁶ ただ、各クラスとも子どもの人数がほぼ均等であったことが疑問として残る。つまり、「子どもが自分の好きな授業(科目)を選ぶことができる」のだとすれば、授業参加人数に「偏り」が生じるのではないかと考えられる。しかし、この疑念について解き明かすための「聞き取り」の時間がとれなかったため、後日の課題として残された。また、「好きな授業を選ぶことができる」とするならば、子どもの学習傾向が、フランスの基準カリキュラムと合致しない可能性も生ずるのであり、この点についての配慮の有無についても不明なままである。また、「好きな授業を選ぶことができる」ということとホームクラスとの関係はどのようになっているのかについても不明である。

あることが特徴である。「何を」を選ぶことができるオープン・システムではあるが、「どのように」という学習主体のオープン・システムではないといえることができるだろう。

第2には、休憩時間にはあるが、CPの1学級を見ることができたことである。ここでは、もっぱら「学習材」についてであった。入門期のフランス語の指導（学習）とオープン・システムとがどのように関わっているのか、はなはだ興味ひかれた。この学級は、他とは異なり、三方が窓または壁であり、一方が開かれている。従来型の教室で考えると廊下側が壁もドアもない状況である。そしてこの三方には、さまざまな「学習材」が置かれている。黒板側が子どものデッサン付のテキスト、窓側がアルバム類、その向かい側が、子どもが書いた、あるいは子どもが話をしたことが教師によって模造紙に書かれたテキスト類。それぞれのテキストの下には箱が置かれており、単語カードが入っている。単語カードを組み合わせれば、上に貼ってあるテキストになる。ここには、子どもたちの「自由な学び」の可能性を見ることができる。

この学級の子どもたちは、フランス語の学習（読み、書き、話し、聞くという言語活動）のために用いるのは、すべて自分たちの語りであったり、書いた作文である。教科書非使用ばかりではなく、大人が子ども向けに書いたテキスト類なども使わない。まさに、「子ども自身が学習材となる」わけである。サン・メリー小学校で、子ども自身が学習材となるような教育活動をしているのは、この先生と、ぼくをこの学校に導いてくれた先生の二人だけである。CP学級のこの先生は、必ずしもフレネ教育を自らの教育実践のテーマとしているわけではないけれども、子どもが言語を獲得していくには、子ども自身が学習材となることが、いちばん学力が付くと考えているということであった。9月入学期から半年あまりの、子どもたちの学習の後を示す学習ノートを見る機会に恵まれたが、着実にフランス語能力を付けていることが分かるものであった。しかしそれが、他の方法と比して「早い」とか「遅い」とかの評価を下すことのできる対象となるのかどうかについては、不明である。とは言っても「早い」「遅い」がどれほどの意味があるのか、その問い自体に、ぼくは意味を認めるわけではないけれども。むしろ、「生き生きと自らを語り、他者に耳を傾け、自らの内奥にある表現意欲を高め、またそれを実際に表出する」フランス語能力として、比較対照するというのであれば、話は別になるのだが。残念ながら、そのことについて担当する先生に聞き取ることもできなかつたし、時間の関係で授業の参観ができなかつたのには悔いが残るところである。

第3は、読書指導に関することである。併せて学校図書館についても触れておきたい。

CE1の1学級が学校図書館で「読書指導」を持った。図書館のソファコーナーで口の形に座り、教師主導で、幾人かの子どもが「読んだ本の感想」を発表した。冒険もの、恋の話などであった。すべて創作児童文学である。発表に対して他の子どもが「意見」を言う。印象に残ったのは、「その話は私も好きで読んだけど、あなたの本についての紹介は私の読んだのと違う」という厳しい批判（結局、感想を述べた子は、「もう一回読み直す」という課題が与えられた）、「その本は私も読んだけど、あなたの本の紹介には、これこれか

欠けている」というストーリーの補い（結局、それに対しては、「本を読むというのは、読み手の感想が大切で、その感想の部分をお話ししているのだから、ストーリーの補いのことは止めましょう」という教師の「指導」が入った）などであった。読書の感想交流は、いずれの学校にあってもむずかしいものだという実感を得た。一通り感想交流が済むと、図書館司書が、数冊の本を紹介した。新しい友との出会いの物語、「親を選ぶことのできる」話などであったが、司書の「語り」に子どもたちは身を乗り出していた。

ところで、サン・メリー小学校の図書館は、非常に充実している。フランス共和国の学校図書館は、それがないところさえ数多く、あってもきわめて貧弱である。もちろん学校図書館で働く司書はいないと言っても過言ではないほどに稀有である。スペースは 7m×14m、蔵書数は 11,000 冊。すべての本と 500 名の子どもたちの名前がコンピュータに登録しており（バーコード入力。登録フォームは司書が作成）、開架式の図書の貸し出し・返却は、子どもがコンピュータを操作する。蔵書の類別で言えば、アルバム（絵本など）、ロマン（文学）、ドキュマン（歴史・科学書や辞書類）がそれぞれ 1/3 ずつとなっている。また、書架は比較的安く、子どもの目線の届く、また背丈に届くようになっていたり、またフロアにも箱が置かれ、そこから取り出すことも可能である。日本の公共図書館でも、熱心な図書館員がいるところでは、こうした傾向が見られるし、フランスの公共図書館はほぼ同傾向である。

前項で述べたようにただ一人の司書（女性）であるがフルタイム雇用の職員ではない。しかし、彼女は、司書専門職としての力量を遺憾なく発揮しているばかりではなく、子どもの研究に関してもたぐいまれなる力量を発揮している。選書はすべて彼女に任せられている⁷が、司書は、児童図書選書の専門委員会（「本の喜び図書館」をベースとした全国組織）が出版する出版ガイドなど数多く参照し、彼女自身が読み、納得のいったものを購入している。500 名もの子どもたちの氏名、それぞれの読書傾向を把握し、日々の子どものコミュニケーションはきわめて良好である。

学校図書館は、終日子どもに解放されている。つまり、いついかなる時に子どもが本を借りにきても、またそこで読書してもかまわない、ということである。このことは、これまで述べてきたサン・メリー小学校のオープン・システムについて、さらに豊かなイメージを膨らませることになる。一人ひとりの子どもから見れば、とくに学校図書館という場に注目してみると、「教師を選ぶ自由」「教科を選ぶ自由」「学ぶ場を選ぶ自由」そして「学ぶ時間を選ぶ自由」がある、ということになる。もちろん、登下校や給食など、枠組みにおいて「拘束」されるところがあるけれども、これら 4 つの自由の行使は子どもに対して「学習権」として認められているわけである。

フランスにおける学校教育の大きな問題は、「子どもの暴力的な関わり」である。子ども

⁷ このあたり、フランスの「専門職」の位置づけの重さを感じさせられる。我が国での公共図書館司書、司書教諭の「専門職」としての位置づけはきわめて低いことを思い知らされるのである。いわんや、公共図書館の民営化の動向に対して、教育界はどれほど敏感であろうか。

間においてももちろん、対教師においてもそれが見られる。ほとんどの学校において「休憩時などの子どもの遊びには暴力が見られ、深刻な問題となっている」との報道を目にもし、実際にその現場を目撃などもしている。憎しみやねたみ、差別などの対他認識、対他関係から来る従来から見られた暴力なのではなく、ほとんどが、内面の感情そのままの発現となっている。この原因が何にあるのか、多くの心理学者や教育者が指摘することは、家庭における日常的なコミュニケーションに、内面感情をていねいに受け止める土壌が失われつつあることに関わっている、ということである。社会の高度化、複雑化、そして自然的なものを喪失してきている文明化などの生活の変化に対して、付いていくのがやっとの若い親。子どもは育つ過程で、親（大人）から「手ほどき」を受けながら「学んでいく」という従来の子育てがなくなっている現実。これらによって、コミュニケーションの力を身につけていくプロセスも方法も喪失し、テレビやゲームなどの「人工的なもの」、即時的に身につけることができるようなものによって「文化的な力」を付けるけれど、その「文化」に対する感情では相互交流性を期待することができない。もっぱら自己感情を対象に向けるだけである。このような子どもの人間的傾向に対して、学校はどう受け止めていくのか。非常に大きな、かつ困難な現実がある。

サン・メリー小学校では、他の学校に比して、子どもの暴力的傾向は見られないと言う。それが先に挙げた4つの自由、つまり学習権にあるなどとは、短絡的に言うつもりはない。しかしながら、少なくともその学習権を保障する、空間、時間、文化、人間関係があることには着目しなければならないだろう。その一つの例として学校図書館の存在をあげることができる。ただ本があるだけではない、本という文化と子どもという人間とを結ぶ専門家がおり、それが日常的に力量を発揮する学校システムがあるということが大きいのである。また、教員集団と子どもとの関係も見逃すことができない。サン・メリー小学校には職員会議や学年会議が定例である（週1回程度）が、職員室はなく、教室内に教師の執務机があるのはフランスの学校に共通している。多くの学校では、それ故に、教師は「壁で隔てられた」教室にある執務机がただ一つの居場所であり、他のクラスの教師や子どもとの交流の機会は少なくなる。フレネ教育に取り組んでいる学校などでは、教師と子どもとの共同の会議がもたれるなど、そのクラス数が多ければ多いほど、教師集団と子どもたちとのコミュニケーションが広がっていく。そして、ここサン・メリー小学校はオープンであることから、子どもが複数の教師とつねにコミュニケーションをとる機会がある。同一フロアに、つねに複数の教師の姿を認め、交流ができることは、子どもの人間的資質によりふさわしい教師の人間的資質が開かれていることを意味している。「担任外の子どものことだから口出しできない」とか「自分のクラスの子どもには甘く、他のクラスの子どもにはきつく」などという「身内主義」などは、学校教育の悪しき風習であるが、少なくともオープン・システムはその「壁」を無くしてしまう可能性を強く持っているのである。そして、サン・メリー小学校はその可能性を、他の学校に比して、出現させているということができるだろう。

ごく短い時間での、しかも場所をあちこち変えての、落ち着かない参観であったため、教師や子どもの活動、とくに、「学びにおける自治と自律」に結合させての参観記にはならなかった。しかしながら、親たちが学級減の政策に対して大きな怒りを持ち、結束を固めているということに対して、納得のいく「学びのためのオープンな空間」という実感を得たことは大きな成果である。